

研究記録と文化伝承のための協働について

「早川昇ノート」の解読と出版に伴う関係地域との交渉を通じて

百瀬響（北海道教育大学札幌校）

1. 「早川昇ノート」に関して

『アイヌの民俗』の著者である早川昇（1908-1982）は、慶応大学経済学部在学中に、柳田國男、折口信夫に師事し、民俗学、国文学を学んだ。1931年に慶応大学を卒業、同大学院に進学したが、病気のために郷里の小樽に戻った後は、高校非常勤教師、小樽市立図書館嘱託などを勤めながら、国内の民俗文化、アイヌ文化、沖縄文化など、多岐にわたる調査研究を続けた。「早川昇ノート」は、およそ1943年から1979年までの間に、早川昇が行なった調査研究の記録やメモなどから成るノート群である。上述した本州・北海道・沖縄文化および北海道アイヌや樺太アイヌ文化に関するフィールドノートの清書、これらの調査に関する考察やメモ、当時の講演記録（北海道の文化に関するもの）、新聞や雑誌・文献の詳細な写しなどを含む。

アイヌ文化に関しては、樺太（第二次世界大戦後の北海道移住者）・小樽・胆振・日高・旭川・帯広などの地域の記録が主となっている。情報提供者への質問内容は、地理、経済（漁狩猟、農業、食料、交換）、社会（慣習、親族）、宗教（儀礼、トウス〈巫術〉、神道などとの習合）、アイヌ語、女性の文化（織物、入れ墨、下紐〈貞操帯〉）、言語、口頭伝承（和語によるユーカラ、昔話の記録）など多岐にわたる。さらに、同一地域で、同じ質問（とくに同一単語、同一儀礼ほか）を数年にわたり、繰り返し各情報提供者に聞いている。

文化変容研究の観点からも、この作業の重要性は強調されるべきであり、なるべく省略等をしないことが、「早川昇ノート」の——後述するような「現代的」——学術的価値を高めることになると考えられる。アイヌ文化研究の観点からみた同ノートの特色としては、次の2点があげられる。第一に、早川の情報提供者には、明治上旬に幼少期を過ごした人も多く、明治時代から戦後の混乱期を経て、高度経済成長期に至るまでの、比較的記録が少ないアイヌ文化の変容状況が詳細に記されている点である。それらの情報には、現在では見られない文化要素が記されている事例も存在する。第二に、これらの調査記録には、調査日時、場所、姓名・年齢などが明記されており、かつ、「聞き取り調査の結果と自らの考察・意見を分けて記述する」という原則が守られている。アイヌ研究においては、1980年代に至ってもこの原則が必ずしも守られていたとは言い難い状況があり、アイヌ文化研究のみならず、記録された地域の人々の文化継承に資するに

貴重な資料であると考えられる。（なお、「早川昇ノート」については、現在、ご遺族と国立アイヌ民族博物館準備室との間で交渉が進められており、今後、同博物館の資料として保存されることが予想される。そのため、同ノートについては——個人情報関係から、何らかの制限が設けられることになるであろうが——研究者・関係者らに公開されるであろうことが期待される）。

2. 解読・出版に関わる経緯

同ノートについては、早川の没後翌年から、ご遺族の希望を受けて出版が企画されたが、編集を担っていた中心人物の健康悪化などの事情により、長らく頓挫していた。同ノートの記述には、万葉仮名が多様されていることから、ある程度の文書解読の知識が必要とされる。演者（百瀬）は、2013年にご遺族との連絡がついたことをきっかけに、ご遺族・関係者らからの引き継ぎを受け、ノートの解読と情報の入力を含めた、出版のための作業を続けている。

一方で、「早川昇ノート」の重要性としてあげた諸点は、現在ではその公開に多くの制約が伴う。とくに、資料には個人情報が含まれるため、発表には何らかの線引きが必要となる。一方、個人名を示すことによって、文化の再現性・情報の精度は飛躍的に高まり、当地の文化の特徴が様々な部分で判明する可能性が高い（例えば、各家系や地区ごとの文化的差異が明らかになるなど、より「正確」な情報を伝えうる可能性がある）。出版上のもう一つの作業としては、出版にあたっては、関係者の了承を得ることが不可欠である。

3. 情報提供者の関係者および関係諸地域の人々との協働について

演者は、同ノート出版のための作業として、情報提供者の子孫やその地域の人々との交渉を、解読作業と合わせて行ってきたが、地方部の高齢化や過疎化の進行が、作業を阻む要因の一つとなっている。本発表では、演者による同ノートの解読と出版に伴う地元の人々との交渉について、2地域の事例を中心に示し、アイヌ文化の現状と研究記録を文化伝承に資するための協働の過程を報告する。

参考文献

早川昇 1975 『アイヌの民俗』 岩崎美術社

キーワード アイヌ、早川昇、研究者のフィールドノート、文化の「伝承」